Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-05

都市型中間施設の効果と課題 ：「のびやかスペースあーち」10周年調査の質的データ分析から

津田，英二

(Citation)
神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,11(1):111-119

(Issue Date)
2017-09-30

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010028

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010028

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要
第11巻第１号　2017

研究報告

都市型中間施設の効果と課題
～「のびやかスペースあーち」10周年調査の質的データ分析から～

The Benefits and Agendas of Urban Intermediate Facility

津田　英二*
Eiji TSUDA*

要約：本論は、神戸大学大学院人間発達環境学研究科のサテライト施設「のびやかスペースあーち（以下、「あーち」と略記）」をモデルとして提示した都市型中間施設の効果と課題を明らかにすることを目的としている。「のびやかスペースあーち」10周年調査として実施したインタビュー調査のデータに基づき、私的領域に閉塞した生活を共同性に開くことに貢献しているかどうか、対話的コミュニケーションが成立するコミュニティを形成・拡張しているかどうかといった２つの観点から、評価を行った。分析の結果、第一に、「あーち」が、私的領域に閉塞した生活を、コミュニケーションと支援を介して公的空間に開いていく機能をもっていることを確認することができた。第二に、「あーち」が、自己や他者の異質性への気づきや変容を通して、多層的なコミュニティを形成し、認識変容を介して外部社会に影響を与えているということが明らかになった。多様な人たちが相互に影響を与え合うコミュニティがいくつも生まれ、さらに複数のコミュニティどうしが相互に影響を与え合う、といった営みが生起するような「あーち」のプログラムや場のしかけづくりが、都市型中間施設の今後の重要な課題であることを説明した。

１　都市型中間施設の概念

１）「のびやかスペースあーち」の沿革と理念

本論は、都市型中間施設としての機能を担う施設が、実際にどのような社会的な効果を上げることができているのか、またその実践上の困難や課題は何かといったことを、事例に基づいて検討しようとするものである。事例は、神戸大学大学院人間発達環境学研究科のサテライト施設として2005年に開設した「のびやかスペースあーち」（以下「あーち」と略記）であり、2015年度に実施した10周年調査のインタビューデータに基づいて検討を行う。

「あーち」は、「子育て支援をきっかけにした共に生きるまちづくり」をめざし、住民に広く開かれた施設として開設され、この理念に基づいた運営努力が行われてきた。一般には社会の要請に応じて「子育て支援施設」として認知されているが、より広くインクルーシヴな社会を創成する拠点として位置づけようとしてきた。つまり、子育て支援という課題をテーマとして掲げ、実際に子育て支援の実践を遂行しつつ、それに関わる人々の学びや社会関係の創出を支援していこうとする指向性をもつ施設なのである。

「あーち」は、神戸市と神戸大学との連携協定に基づき、神戸市灘区役所の移転に伴う空室を利用して神戸大学が運営を行ってきたものである。神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの「子ども・家庭支援部門」及び「障害共生支援部門」が旗振り役となって、当初から行政、ＮＰＯ、企業、住民との協働をめざしてきた。多様な担い手がボランティアベースでリーダー役となるプログラムには、造形や音楽のワークショップ、人形劇や児童劇、親の学習会や交流会など、さまざまに展開している。これらすべては、「あーち」の運営に関わる組織や個人が自発的に参加する連絡協議会によって管理される、「あーち」の主催プログラムである。また、毎月発行している「あーち通信」（2016年７月で130号）は利用者の参加によって紙面が構成され、協働を象徴する媒体となっている。

こうした取り組みには、商品社会の中で子育てが個別化している現状を矛盾と捉え、子育てに関心のある多くの組織や個人の参加による子育ての社会化をめざそうとする精神がある。したがって、子育てに関わる課題に対する認識、学び、行動を社会に広げ、共有していくこと、そして個別化する課題を可能な限り公共的な課題に拡張することのできる緩やかな公共空間を形成することがめざされてきた。

「あーち」は、こうした社会教育や児童福祉の実践現場となるだけでなく、実践的研究のフィールドや学生のサービスラーニングの現場としても活用されてきている。「あーち」での実践を素材とした研究論文は数多く発行され、また学生たちによって卒業論文、修士論文、博士論文が執筆されてきている。

なお、「あーち」は、金曜日を除く火曜日から土曜日の10時30分から16時30分まで、金曜日のみ18時までを開館時間としている。空間の構成は子育て広場として機能する「ふらっと」、自由な表現活動のためのスペース「あーと」、音楽や展示や学習等多目的に使用される「こらぼ」、それに談話スペースを兼ねた情報コー

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

（2017年３月31日　受付
2017年３月31日　受理）

ナーに分かれ、総面積は450㎡余りである。

2） なぜ都市型中間施設か：質的データ分析の観点

「あーち」は、行政との連携に基づいて大学が運営する施設であり、さまざまな点で特殊である。行政のセクショナリズムから相対的に自由であること、研究開発が前提となっていることで実験的な取り組みが比較的自由にできること、制度的な縛りがなく自律的にルールを決めていくことができることなど、特殊であるがゆえに恵まれた条件も多い。その分、「あーち」の理念や実践の中で、社会的に開かれた施設に普遍化できる特徴をモデル化して概念提示する必要がある。

そこで、「あーち」がめざしてきた理念を明確にするため、筆者は「都市型中間施設」という語を立ち上げ、概念化の努力をしてきた。“「都市型中間施設」とは、機能分化したシステムや孤立した個人をつなぎ、さまざまな背景をもつ人たちの間の対話的コミュニケーションを活性化することで、社会的排除を受ける傾向にある人たちの社会参加を促進し、同時に社会的な問題に対する参加者の当時者性を高めることができる場”（津田 a、2011、p.1）と説明している。

この概念に基づいて、本論の質的データ分析の観点として２点整理しておく。

第一に、子育てが私的領域としての家庭内に閉塞する一般的状況に対して、公共空間への参加を通して、子育ての共同性を取り戻し促進する機能をもつという点である[1)]。機能分化したシステムは、困難な子育てに対して個別的に高度な対応を行おうとする。個別化されたニーズをサービスによって満たすという合理主義は、困難に直面したときに他者と困難を分かちあいながら解決しようとする共同性よりも、進歩的であると捉えられる。他者への無関心、核家族化、地域社会の衰退といった、漸次進行してきた社会現象とも相まって、子育ては共同的な営みではなく、私的領域に閉塞した営みになってきた。「都市型中間施設」は、こうした私事に閉塞する私たちの生活のあり方を見直すきっかけとして、他者との対話的コミュニケーションを活性化する。本論の質的データ分析の観点としては、子育ての困難（あるいは子育てだけに限らず持ち込まれる困難）を共同化する場となっているかどうかということになろう。

第二に、対話的コミュニケーションが成立するコミュニティを形成し広げていく機能をもつという点である。私的領域に閉塞した子育てにおいて生じる困難に対して、機能分化したシステムは私事への応答として対応する。困難を抱えた個々人は、商品化されたサービスを購入する消費者として遇せられ、ニーズに対応したサービスが市場を介して提供される。この隘路から脱するためには、新しいコミュニティの創成が必要とされる。閉ざされた私事性を変容させる力を持つ関係性の形成が、「都市型中間施設」の機能として期待されるのである。本論の質的データ分析の観点としては、子育ての困難が語られるコミュニティを形成する実践となっているかどうか、またそうしたコミュニティが「都市型中間施設」内部に閉塞しない形で拡張しているかどうかということになろう。

本論では、これら２つの観点、つまり私的領域に閉塞した生活を開いていくこと、対話的コミュニケーションが成立するコミュニティを形成・拡張していくことに対して、「都市型中間施設」がどのような貢献をすることができるか、ということについて検討する。

2 「のびやかスペースあーち」10周年調査

1） 調査の概要

「あーち」の実践の成果や課題を検討するために、開設５周年にあたる2010年と開設10周年にあたる2015年に、「あーち」利用者等を対象とした調査を行った。２回の調査では、共通して利用者悉皆のアンケート調査を実施したが、2015年の調査では加えてインタビュー調査も行った。本論では、このうちインタビュー調査の結果に基づいて検討を行うが、以下でアンケート調査の概要にも簡単に触れておく。

2010年調査と2015年調査はそれぞれ、調査票配票数2043、2639、回収数544、432（回収率26.6％、16.4％）であった。「あーち」は利用料を徴収しないが、利用者登録を課しており、登録票に記載された住所に配票を行った。「あーち」が研究機関であるということについて、利用者には周知しており、こういった調査に個人情報を利用することについては予め利用者の了解を得ている。とはいえ、登録票のデータは、利用者の転居などの変更が生じても更新できない場合が多く、未達の調査票も数多くあった。ちなみに、2015年6月時点での利用者登録数は3626名となっている。

これらのアンケート調査結果は、それぞれ論文としてまとめ公開している（津田他、2012c；伊藤他、2016）。

ここでは、本論で取り上げるインタビュー調査の分析と関わる点に絞って、2015年に実施したアンケート調査結果を簡単に整理しておくことにする。

第一に、利用者個々人が抱える問題や悩みが、どの程度他の利用者等との間で共有される傾向にあるかという点に関連するデータである。多様なプログラムに参加していることと、「わが子が障害のある子どもと一緒に遊ぶことには抵抗がある」かどうか問うた設問への回答との間には相関がみられなかった。これは、そもそも「わが子が障害のある子どもと一緒に遊ぶこと」に対する抵抗感をもっている回答者がほとんどいなかったことと関連がありそうである。他方、「あーち」を利用したことによって「障がい者・児がいきいきと生活するための支援」「高齢者がいきいきと生活するための支援」について興味・関心が高まったとする回答の平均値は、それぞれ2.57、2.09であった（「４よくあてはまる」「３あてはまる」「２あまりあてはまらない」「１全くあてはまらない」の４段階評価）。これらの数値も、興味・関心が高まったとするには十分ではない。ただし、これらのデータを、どのくらい多様な「あーち」のプログラムに参加しているかというデータとクロスさせると、いずれも高い数値で相関が示された。利用者は、「あーち」のさまざまなしかけに関わるうちに、支援の必要な人たちに対する理解が促進されるようになったと言うことはできそうである。

第二に、「あーち」での実践を通して新しいコミュニティが形成されているか、またそのコミュニティが外部に開かれ拡張しているかという点に関連するデータである。「あーち」利用の満足

表１　被調査者の属性

立場		あーちとのかかわり
スタッフ（５名）	a	受付スタッフとして６年目。
	b	ＰＴＡ役員の経験を生かし、受付スタッフとして６年目。
	c	６年前から利用者として参加し、その後受付スタッフとなり２年目。
	d	ＰＴＡ役員の経験を生かし、受付スタッフとして２年目。
	e	ソーシャルワーカーとしての経験を生かし、３年間相談員として活動。その後学生となって「あーち」の経験を論文にまとめ、現在は大学職員として教育プログラムに関与。
プログラムリーダー（12名）	f	「あーち」設立直後から保護者として利用し、その後乳児と保護者を対象としたプログラムのリーダーとして関与。
	g	保育士として乳幼児対象のプログラムリーダーとして関与。その後、保護者対象の子育て支援講座も企画運営。
	h	「あーち」設立時から現在まで、発達障害児やその保護者のためのプログラムを企画・運営。「あーち」の運営会議にも継続的に参加。
	i	「あーち」設立後まもなく、乳児の保護者として２～３年利用し、通信編集、保護者発のプログラムの企画運営に関与。
	j	行政のコーディネイターとして「あーち」設立時に運営や子育て相談の側面から関与。
	k	元教員。「あーち」設立時から、平和をテーマとしたプログラムなどの企画運営に関与。「あーち」の運営会議にも継続的に参加。
	l	障害児の保護者として利用し、「あーち」設立直後から通信編集、障害児や保護者向けの運営などに関与。
	m	「あーち」設立時から現在まで、子育て相談を実施。
	n	「あーち」設立時から現在まで、子育て相談を実施。
	o	アーティスト。造形ワークショップのリーダーとして「あーち」設立時から現在まで関与。
	p	元教員。人形劇プログラムのリーダーとして「あーち」設立時から現在まで関与。「あーち」の運営会議にも継続的に参加。
	q	音楽療法士。幼児対象の音楽プログラムのリーダーとして、「あーち」設立直後から現在まで関与。
学生（５名）	r	在学生として「あーち」にかかわって１年目。
	s	在学生として「あーち」にかかわって１年目。
	t	在学生として「あーち」にかかわって３年目。
	u	在学生として「あーち」にかかわって２年目。
	v	在学生として「あーち」にかかわって７年目。
卒業生（３名）	w	卒業生。在学中に４年間関与。
	x	卒業生。在学中に４年以上関与。
	y	卒業生。在学中に１年間関与。保護者対象プログラムのリーダーも経験。

度について、「多様な境遇・年齢の人と知り合えた」「多様な境遇・年齢の人との相互理解が深まった」「『あーち』以外の場でも交流できる人と知り合えた」とする回答の平均値がそれぞれ2.72、2.41、2.51であり、それほど高い値とは言えない（満足度が最も高いと4、最も低いと1、中央値が2.5）。「あーち」において、そうした「多様な境遇・年齢の人と知り合いたい」とする期待値も2.53と、そもそも高くはない。ただし、これらのデータを、どのくらい多様な「あーち」のプログラムに参加しているかというデータとクロスさせると、いずれも高い数値で相関が示された。利用者は、「あーち」のさまざまなしかけに関わるうちに、多様な人たちと出会い、関係形成がなされていくのだと理解することができる。

このように、「あーち」の取り組みが、私的領域に閉塞した生活を開いていくこと、対話的コミュニケーションが成立するコミュニティを形成・拡張していくことに貢献しているかどうか判断するためには、今回のアンケート調査結果に基づくだけでは不十分である。量的データによって、よく利用する層には変化が起きているが、あまり利用していない層にはほとんど変化が起きていないということは分かったが、具体的にどのような内容を伴った変化であるのか、その変化が利用者全体に伝播しないのはなぜかといったことを検討することには限界があった。

さて、本論で追究しようとしているのは、コミュニケーションの質に関することであり、量的データからの読み取りには限界がある。質的データに基づいて、「あーち」が私的領域に囲い込まれた子育ての閉塞性を開いていく場として機能していること、対話的コミュニケーションを媒介して新しいコミュニティが成立・拡張する場として機能していることについて、説明していこうと思う。

2）　インタビュー調査の概要と分析方法

インタビュー調査は、2015年７月から2016年１月にかけて、合計25名の関係者を対象として実施した。25名の内訳は、「あーち」の日々の運営に関わるスタッフ５名、「あーち」のさまざまなプログラムを運営するリーダー12名、ボランティア学生８名（うち３名は卒業生）である。いずれもアクティブな活動を通して「あーち」に関わっている人たちである。なお、これらの被調査者の属性は固定的なものではない。リーダー、スタッフなどではなく、市民として「あーち」を利用した経験者は25名のうち17名に上る。単純な利用者へのインタビューを組織的に実施していないのは、これらの被調査者の中にすでに利用者としての視点をもっている人たちが含まれるからである。表１は、被調査者のプロフィールを整理したものである。

インタビューは、大まかな調査項目を指針として被調査者に自由に語ってもらう半構造化面接として実施した。予め被調査者に共通して示した調査項目は、「あーちの特徴をどのように捉えているか」「達成感を感じることができたエピソード」「あーちでの活動によって得られた自分自身の学び」の３点であった。インタビュアーは、調査実施の中心となった研究会参加者の他、「あーち」の実践に関わった経験があり、本調査に深い関心と理解のある神戸大学の学生や卒業生が担った。

なお、調査実施に先立って、神戸大学大学院人間発達環境学研究科・研究倫理審査委員会に研究倫理審査を申請し、2015年７月

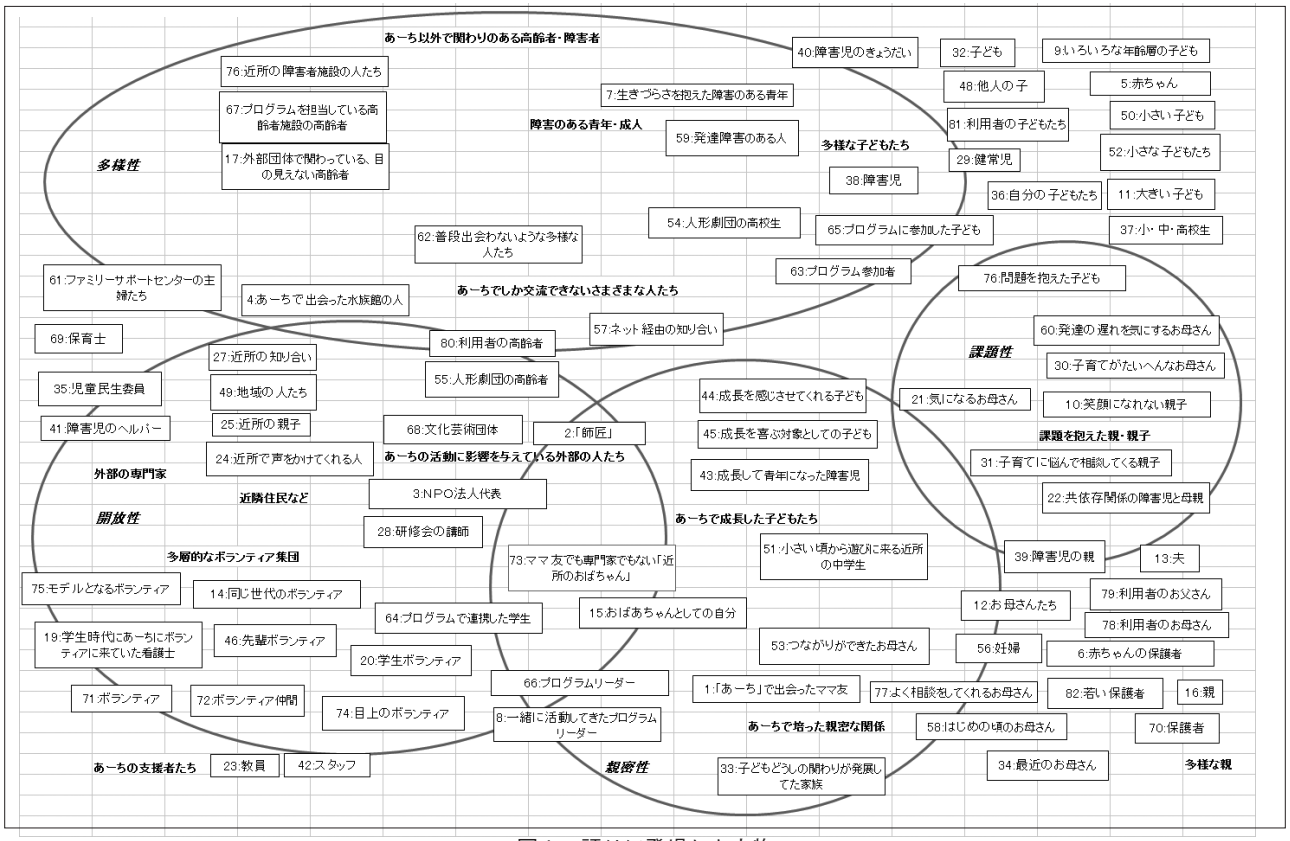


図１　語りに登場した人物

に承認（No.151）を得ている。

インタビューデータの分析は次のような手順で行った。まず、個々のデータを読み、次の２つの観点に関わる部分を抜き出した。１）子育ての共同性を取り戻す営みに関連する部分、２）対話的コミュニケーションの土台となるコミュニティの形成・拡張に関連する部分である。抽出されたデータは185個であった。次に、それら抜き出した部分にラベルを付し、共通点のあるラベルを集め、それぞれにカテゴリー名を付した。また、これらのカテゴリー間の関係を検討し、カテゴリーマップを作成することによって、語りの全体像の把握をめざした。このカテゴリーマップから読み取ることのできる全体像と個々の語りの細部との間を往復することで、語りの全体と部分を読み解いた。

3　インタビューデータの分析

1）語りに登場する人物

まず、本論で焦点を当てる経験が、どのような人たちとの関係の中で起こっていたのかということについて把握しておく。私的領域に閉じ込められ公論化しにくい子育ての経験を端緒とし、対話的コミュニケーションを通してコミュニティが形成されるという過程を検討しているのである。したがって、そうしたコミュニティは、利用者全体を巻き込んで一気に形成されるようなものではない。ひそひそ話として語られるようなことが、公共的課題として承認されていく過程が重要なのである。とすれば、どのような人たちとの間にコミュニケーションが生じ、どのような人たちを巻き込んでコミュニティが形成されているのかということを、まずは捉える必要がある。

語りに登場する人物を基準にして作成したカテゴリーマップが図１である。このカテゴリーマップから読み取ることができた要点は、以下の４点であった。

第一に、被調査者が「あーち」で出会った人たちの多様性を認識していたという点である。日常生活では出会うことのない人たちとの出会い、日々の生活に困難をもつ人たちに意識が向かう経験などが語られている。象徴的には、次のような発言である。①では利用者の多様性が「あーち」の特徴となっていること、②では「あーち」では異質な他者との関係が日常的であることが言及されている。

“経験していくと、子ども連れの人だけではなくって、まあ例えば障がいのある方とか、地域のお年寄りとか、誰でも来ていい場所なんだなというのがわかりました。”（プログラムリーダー）①

“昔はもう、全然あっち…別に避けるわけじゃないけど、もう全く一線を置いたあっち側の人って感じでは思っていたんで、……接し方も分からないし、やっぱここに来るようになって、ご近所の発達障害持ってるお嬢ちゃんとママとかともすごい話するようになったし、……うーん。特に自分から歩み寄ってはなかったですね。……理解は、とまではいかないけれども、自分の中の何かこう、垣根がとれた感じですかね。”（スタッフ）②

第二に、社会に一般的にある課題が身近になるような他者との出会いの経験が語られるという点である。例えば次のような発言である。③からは、課題を抱え支援を必要としている人たちの存在が、「あーち」で出会った人たちに省察を求める機会となって

いる様子を読み取ることができよう。②も同様の言及と理解することができる。

“大変な思いしてる人とか、もう、どうしようもない、にっちもさっちもいかないような状況に陥ってる人がいて、こういう施設が必要なんだってわかってからは、ちょっとその、自分のなんて言うか、力不足なところとか、しんどいなーっていう気持ちがちょっと芽生えてきた。”（スタッフ）③

第三に、子どもの成長の歓びが語られたり、子どもの成長に伴う課題の変化について語られたりする程度の時間的な長さをもった関わりの経験が語られているという点である。例えば次のような発言である。④では子どもが目に見えて成長していく様子を「あーち」で出会った人たちが共に歓んでいることが述べられ、⑤では、子どもの発達に伴って変化する課題に対応して、関係性やとりくみが変化してきていることが語られている。

“立てなかった子が立てるようになっていたりとか、本当にまあ継続しているプログラムが、ちゃんと正確に、それこそやっぱり、できるようになってくるんですね。それがやっぱり嬉しいです。私たちの、はい、幸せで、まあ、おばあちゃんみたいな心境です。はい（笑）、そういう子どもたちの、やっぱり成長が一番、幸せなことですね、なんか。はい。”（プログラムリーダー）④

“課題は変わるんですよ。だからうちの子で言ったら長い間ここでいっぱい遊ばしてもらいました。で、今は養護学校の高等部に行ってると、高等部から養護学校に来ると、割と軽度の子とかもいると、それもおしゃべりもできる、普通に遊ぶこともできるし、うちの子に絡みあってくれることもできるし、でいわゆる普通の子と遊ぶ感覚になって来るんですよね。学校の中でも。でもそこから派生するものとしては、１つは、養護学校…高等部から養護学校に来てしまった…が、また遊ぶ場所がない、っていうことで、その子たちはちょこちょこ高校の子たちが今来始めている。”（プログラムリーダー、障害児の親）⑤

第四に、多層的な支援者やピアの存在が語られている点である。例えば次のような発言である。⑥では、個人が抱えている課題を媒介として利用者間に信頼関係が醸成されている様子が、また⑦では、多様な他者との出会いが、自然な形での相互支援関係になっている様子が言及されている。「あーち」が信頼関係に基づいた重層的な支援の場になっていることを読み取ることができる。

“こういうのがすごい大変でね、みたいなのを打ち明けてもらったときに、変やけどうれしいというか、信頼してもらえてるんやなあというのがだんだん増えてくるとやっぱりうれしいし、子どもたちも私のことを覚えてくれて、その回を積み重ねるごとに覚えてくれて、このお姉ちゃんこんなことしてくれるから、こういう遊び、言ってみようみたいなのも、多分考えてくれたりとかするので、いいなあと思って。”（学生ボランティア）⑥

“大人の方にも、ちっちゃいお子さんにも、うちの子の状態を目の前で見てもらえる…で、語りかけてもらえる、触って、こう、声かけてもらえる？っていう関係が、子どもから…うちの子からみれば、いろんな子どもといろんな大人と出会うことができる、っていう場になっていったなあ…そういう場だなぁ、っていうふうに思います。”（プログラムリーダー）⑦

以上のように、語りに登場する人物を整理するだけでも、すでに、課題を抱える人たちとの関わりから、社会的関心を共有するコミュニティの存在を予期できる。被調査者の語りの整理を通して、多様な課題を抱えた人たちとの相互の出会いを軸に、支援－被支援の関係が生起しつつ固定化されず、関係性が重層化していく様子、また、その背景として重層的な関係性が成熟するための継続性が重要であることを読み取ることができた。

2）私事から共同への転回

次に、「あーち」が、「都市型中間施設」として、私事に閉塞する私たちの生活のあり方を見直すきっかけとして、他者との対話的コミュニケーションを活性化する機能をもっているかどうかという点から、インタビューデータを整理してみる。図２は、この観点から作成したカテゴリーマップである。

このカテゴリーマップから読み取ることができた要点は、以下の３点である。

第一に、「あーち」が、私的領域に閉ざされた生活課題に苦しむ人たちの居場所になっていることが確認できる点である。例えば次のような発言がみられる。⑨からは、「あーち」に、個々人が抱えている課題を他者と共有してもよいのだという雰囲気があることを読み取ることができる。⑩では、日常的に他者との関係から排除される傾向のある人たちにとって、「あーち」が社会的な関係形成の場になっている様子が語られている。

“自分の子どもが他と比べて、特に小さいお子さんを連れた親子を見ることが多いんですけど、その発達がちょっと遅れてる、とかっていうことに対して、すごい隠したいみたいな気持ちとか、あとは、なんかすごいそれで落ち込んで、認めたくないっていう気持ちはすごくわかるんですけど、そうじゃなくって、もっといろんな人に相談して、どういう風にその子のためになることをしたらいいのか、とか、そういう、なんて言うか、助けがすごい周りにあって、そんなに自分一人で抱え込まなくていいんだな、っていう風に、私だったら、あの、前の私だったら、やっぱり隠したいとか恥ずかしいことだって思ったと思うんですけど、そんなことは全然なくって、いろんな人の助けも借りながらオープンにしていった方が幸せだなっていう風に、いろんな人を見て思えるようになりました。”（スタッフ）⑨

“同じような特性の子がいたら、一緒に走り回れる。まあ、喧嘩はもちろんありますけどね。でも喧嘩できる相手がいるっていうのも、彼らにとったらすごく楽しいっていう感じね。だからよく学校からの子どものね？情報の調査の中に「友達はいますか？」っていう欄があるけど、まあ、健常の子だったらね、「友達何人おっ

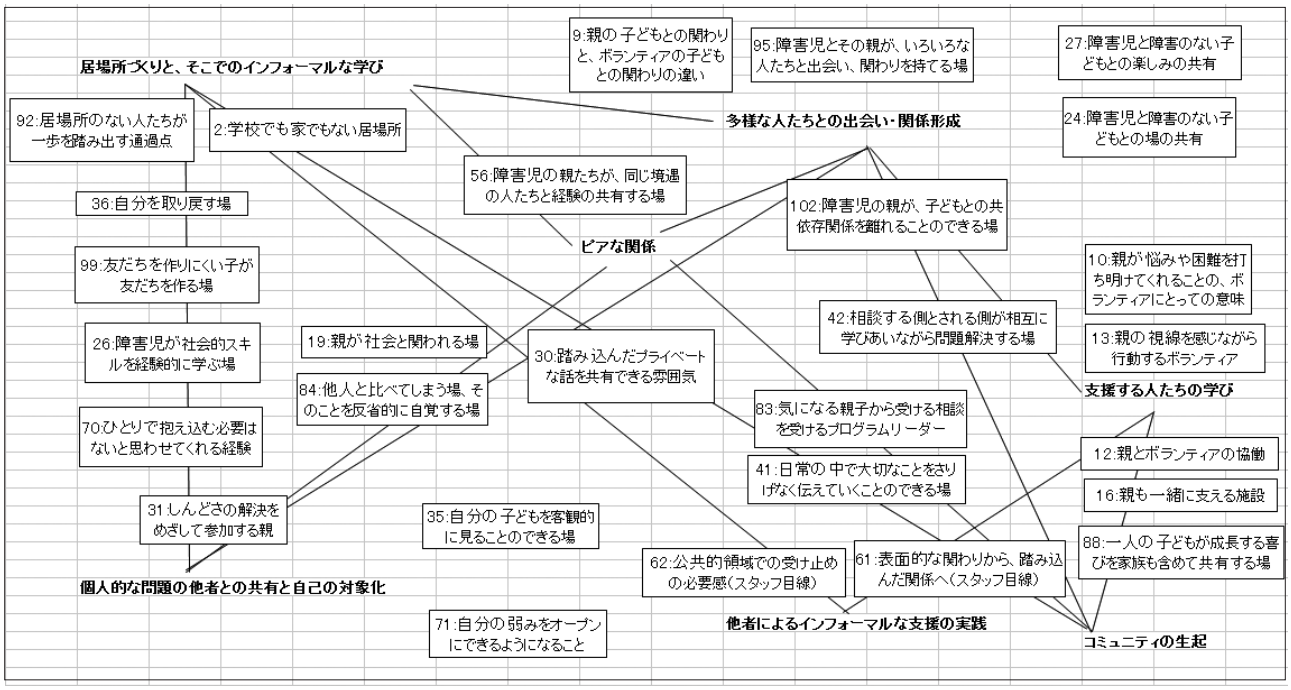


図２　私事から共同への転回

て」みたいな、「20人ぐらいかな」とか、「100人ぐらいかな」って書くだろうけど、「友達ね？」誰を友達と呼ぶんだろうみたいな。実際「家に遊びに行ける友達は、３人ぐらいいるなあ」とかね。いう感じで…なんだろう、ほんとにいわゆる友達っていうのはね、作りにくい子どもたちなので、そういう意味ではここに来て遊ぶ、遊べたら友達。”（プログラムリーダー）⑩

第二に、困難な課題をめぐって、多様な人たちの間にコミュニケーションが生起し、インフォーマルな支援が生起していることが確認できる点である。例えば次のような発言がみられる。⑪では、「あーち」が課題を抱えた個人が課題を共有できる他者と出会う場となっている様子が語られ、⑫では、重たい課題についても前向きに語られるという作法について語られている。「あーち」では、個々人が抱えている課題について、個人的な相談として深刻に語られるような場というよりも、課題を他者と共有する場として、コミュニケーションのモードが自律的に調整されている、と言えるかもしれない。

“いろんな機関を回られて、奔走してるって言って疲れ果ててしまってあーちに駆け込んだっていうお母さんとかもいらっしゃって、そういう意味では同じ気持ちを共有できる仲間が、多分、彼女たちは欲しかったし、公園に行ってもね、多分、自分の子どもが他の子たちと違うと、疎遠になってしまうとか。そこでは同じグループの、共有できるお母さんたちがいないっていうのはすんごい、皆さん同じことをおっしゃってて。本音でいろんなことしゃべれるっていうこともあっただろうし、わずかな時間ね、それがずーっと続くわけではなくてもその一時でも、共有できるものがあればそれすごく大事なんやなっていうのは。”（プログラムリーダー）⑪

“その苦労話でこう笑いあえる、みたいな。「今日大変やったわー」とか。それを暗いトーンでしゃべるんじゃなくて、「こんな大変やったわ」ってある種こう、面白かったなっていうトーンで話し合いながら帰ったりとか、大学で会った時にその話ができたりとかするので、その辺でシェアはしやすかったかなと。”（学生ボランティア）⑫

第三に、支援する側、支援される側双方の学びの場となっていることが確認される点である。例えば次のような発言がみられる。⑬では、若干固定的な支援－被支援関係にある中で、支援者が被支援者から学びを得ていることが、また⑭では、多様な人たちとの相互性の中で、利用者が支援のあり方を学んでいる様子が語られている。

“直接お母さんと触れ合うことによって、いろんなお母さんたちの悩みに答えたり、あるいは、そういうお話をしながら、自分自身もすごく学びになったりすることがあったのでね。一番の学びっていうのはそれでしょうね、きっと。いろんなお子さんたちや悩みを抱えたお母さんたちと、実際に触れ合うことで。…生の声ですね。その中でいろいろと、なんて言うかな、アドバイスしたりしながら。アドバイスしながらもね、別に全部が成功、成功って言うのかな、うまくいったものばかりではないんですね。でも自分で何回かやってるうちに、いろんなね、相談事受けたりとか、話をしているうちに、うまくいった時には、ああ良かったなって思えるし。お母さんたち自身がね、ホッとするというか、あるいは表情が軟らかくなって、「ああそうだったんだ」とかね。疑問とかいろんな事がわかって。”（プログラムリーダー）⑬

“お母さんとおしゃべりするのも楽しいところがあって。子どもと関わるのがメインなんですけど、経験豊富なお母さんから話を聞けるとか、お母さんと子どもの関わりを見て、こうやって接したらいいんやとか。そういうのは体感的に学んでいったみたいな。”

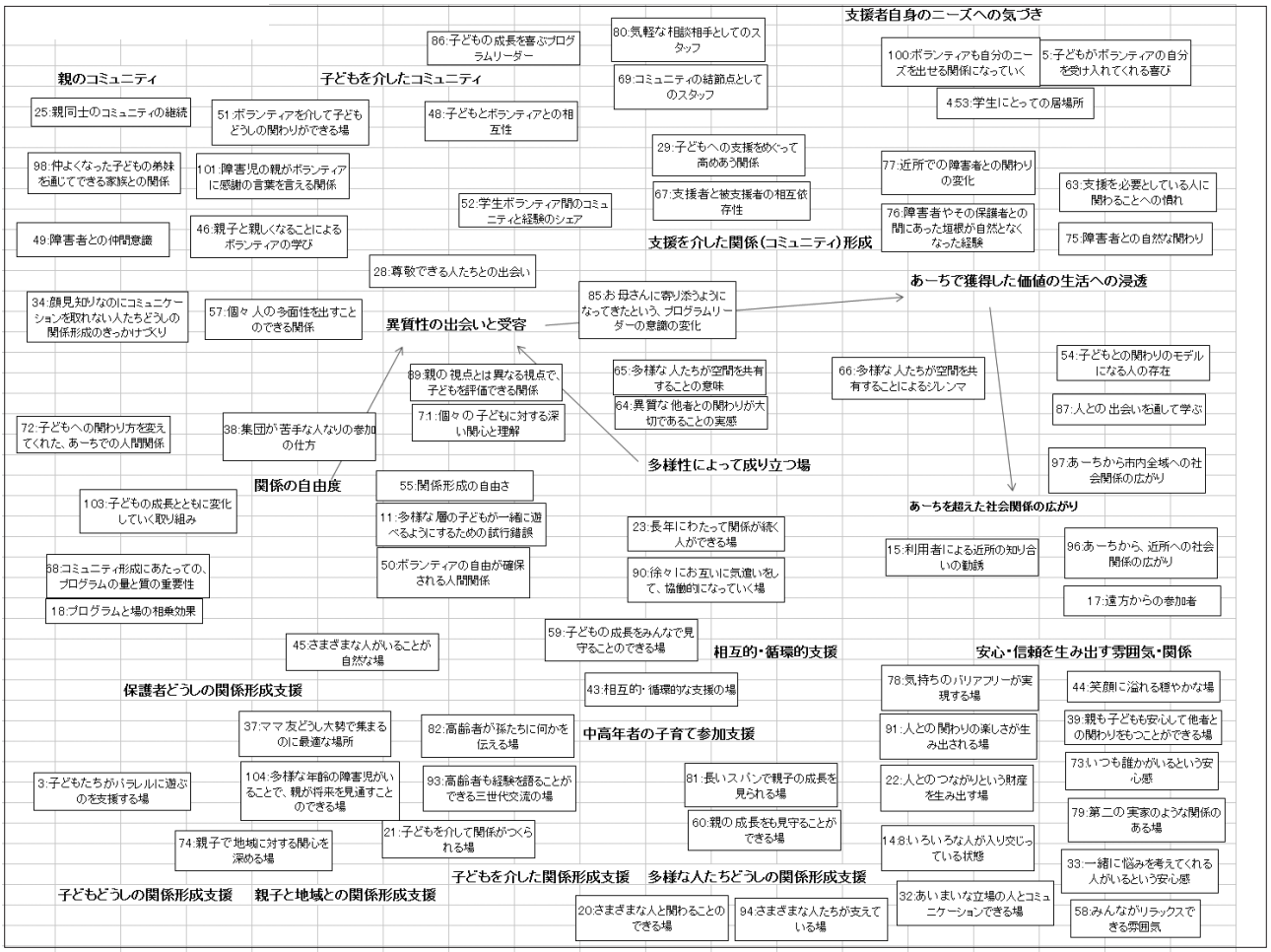


図３　新しいコミュニティの創出

（学生ボランティア）⑭

このように、私的領域から公共的領域に開かれていく過程の分析から、「あーち」を舞台に、困難を抱えた人たちの存在が端緒となったコミュニケーションの生起、それに伴う相互の学びあいやインフォーマルな支援の萌芽を見てとることができた。特に、被調査者の語りの整理を通して、この過程において個人が抱える課題を他者に語るコミュニケーションモードが重要性をもっていることに気づいた。個々人が自らの抱えている課題について語ることを通して、他者と課題を共有しつつも、一方的な支援－被支援ではなく相互性に支えられた関係性が立ち上がるという過程は、場の力（津田、2012a）もさることながら、場の力と相互作用するコミュニケーションモードによって支えられていることがわかった。

3）新しいコミュニティの創出

最後に、「あーち」が、対話的コミュニケーションを介したコミュニティ形成の過程、そのコミュニティが外部社会に向かって開かれていく過程を支援する機能を果たしているかどうか、という視点から、インタビュー結果を分析した。図３は、この観点から作成したカテゴリーマップである。

このカテゴリーマップから読み取ることができる要点は、次の３点である。

第一に、対話的コミュニケーションを介して、「異質性との出会いと受容」によって認識変容が生まれ、その変容が生活に浸透することを通して、「あーちを超えた社会関係への影響」を生み出していることが確認できる点である。例えば、次のような語りがみられる。⑮では、「あーち」で日常的に多様で異質な他者と出会うことによって、他者に対する認識や行動に変化が生じている様子が語られ、また⑯からは、そうした認識や行動の変化が、地域生活の豊かさに貢献している可能性を読み取ることができる。

“すごく、なんか、自然な形かなと思います。なんだろ、やっぱり、今までそういう、例えば、おかしな話になるかもしれないですけど、ハンディキャップをもたれてる方は、なんだろ。やっぱり、行くところが固定化されてて、なかなか、出会う機会っていうのがなかった。……私自身がそうだったし、実習で行って初めて知るみたいな、そんなところがあったんですけど、ここに来たら、やっぱり、こう、そうではなくって、一つの中で行き来している、そういうのがなんか、当たり前なんですけど、今までは、当たり前が遮断されてたというか、分かれてたみたいなところがあるかもしれないですけど……それを共にというところで、すごく、なんか自然な感じが、ナチュラルな感じがしますね。”（スタッフ）⑮

“ここはここでいろんな方と出会えて、それはそれですごく面白

いし、最初はあまり感じなかったんですけど、１年２年経つうちに、今度例えば家の近所の駅の辺とかで、そこであった人に会うと、「やあ！」とか、って声掛けしてくれて、「大きくなったね」とか「元気？」とかって…みんな声掛けしてくれるようになるので、そうなると、ここの場だけじゃなくて、ほんとに自分の住んでる近所でも知り合いになるという、そういう広がり？ができてきますね。”（プログラムリーダー、障害児の母親）⑯

第二に、コミュニティの形成と拡張を支える要素として、「相互的・循環的支援」が確認できる点である。例えば、次のような語りがみられる。⑰では、「あーち」が、力を得た人がその力を他者に伝播していく舞台になっている様子が、また⑱では、支援を受けている人が、自分自身も他者に貢献できることがないか、「あーち」を舞台にして自発的に探索する様子が語られている。

“お母さんたちが得たものを、次じゃあ、知らない人たちのために、伝えるっていうのかな。そういうふうなものができるっていう場ですよね。「あーち」って。それがすごいなと思いますね。うん。自由。”（スタッフ）⑰

“今は何か自然な流れで、誰か彼か、お掃除してくださったりしてるんです。筆を洗ったりとか、使ったものは元に戻すとか、そういう事をしてくださりだしたのは、うれしいですね。……私がそれを言ったとか、何とかじゃなくて、「あーち」自体が持ってるような、居心地のいい空間を使わせていただいてるんだから、っていうような、お母さんも出てこられたんじゃないかしら。だいぶ前からですけどね。”（プログラムリーダー）⑱

第三に、コミュニティの形成と拡張を支える根底に、「安心・信頼を生み出す雰囲気や関係」があることを確認できる点である。例えば、次のような語りがみられる。⑲では、「あーち」が、多様で多層的な関係性を媒介する開かれたコミュニティとなっていることが、また⑳では、社会関係の形成に困難を抱える傾向のある人であっても自発的に参加できる安心感と自由度が保たれていることが語られている。

“利用者さんが、また違う、もう、ほんとにここがあって助かるっていう声とか、実家に帰ってきたみたいな感じで、皆が迎えてくれるとかっていう言葉を聞いたら、すっごい、やっぱうれしいし、これからもそういう存在であり続けたら、いけたらいいなーって。”（スタッフ）⑲

“私はどういう障がいがあってっていう予備知識もなしに入っていくから、で、聞いても忘れちゃったりもしますけれども、特徴はそれぞれあると思います。自閉傾向の方はこういう感じとか、どういう見え方をしてるか、とかはあるかもしれないけれども、皆と関わり合う楽しさ、っていうのかな、その場にいられる、人の中に居られる楽しみっていうか、そんなのもあるでしょう？……（そういうことが）可能になってるんじゃないですかね。出入りも自由でしょう？”（プログラムリーダー）⑳

こうした分析に基づいて、「あーち」において、安心できる雰囲気、他者との信頼感、支援・被支援関係が柔軟に変化する関係性が醸成され、そうしたやわらかいコミュニティにおいて生じる異質性との出会いを通して、参加者に認識変容・態度変容が生じ、社会生活全体に影響を及ぼしているという過程が生まれていることが示唆されたといえよう。特に、被調査者の語りの整理を通して、「あーち」で形成された関係は、「あーち」という場の制約を超えて自律的に広がりをもつため、「あーち」の地域社会への影響を把捉することは容易でないことや、そうした関係の広がりを支えている基盤に、個々人の他者に対する認識や行動の変容があったことが読み取れる。

4　都市型中間施設の可能性と課題

今回のインタビューとその結果の分析によって、次のことを説明することができた。第一に、「あーち」が、私的領域に閉塞した生活を、コミュニケーションと支援を介して公的空間に開いていく機能をもっていることを確認することができた。第二に、「あーち」が、自己や他者の異質性への気づきや変容を通して、多層的なコミュニティを形成し、認識変容を介して外部社会に影響を与えているということである。

同時に被調査者の語りの分析を通して、「あーち」がつくりだしているこうした過程には、開かれた公共性（宮坂、1987、pp.33-34）をプロモートする場の雰囲気やコミュニケーションモードが重要な影響をもっていること、また「あーち」での取り組みが地域社会に影響を及ぼす過程では、個々人の他者に対する認識変容や行動変容が重要な要素となっていることといった知見を得ることができた。

ただし、この分析結果は、複数の語りを総合化する方法によって導かれたものであり、次の点に留意する必要がある。すなわち、これら２つの機能がどのくらいの力をもっているのか、どのくらいの規模の変化を生み出しているのかということを示せない。同時に実施した量的調査で示唆されるのは、先述のように大規模な変化が引き起こされているとは言い難いということである。本論で述べた結論は、むしろ弱く細い流れであるが、確実に存在することを可視化したものであると言えよう。したがって、この流れをどのように強化し広げていくかということが、今後の実践的な課題ということでもある。

さて、2015年10月に開館10周年を迎えた「あーち」は、2016年度途中から新しい拠点を加え「学習支援」「子ども食堂」といった新しいプログラムを開始している。それに伴い、利用者層や連携機関にも変化が生じてきている。2017年度には新しい拠点に統合し、新たなスタートを切る。開設12年目に訪れたこの大きな変化は、「あーち」が「子育て支援をきっかけにした共に生きるまちづくり」に貢献するという設置理念を実現する方途について、今回の10周年調査でえた知見を参照しながら、改めて検討するよい機会だと考えている。

前述したように、今回の量的調査の結果としては、「あーち」が私的領域に閉塞した生活を開いていくこと、対話的コミュニケーションが成立するコミュニティを形成・拡張していくことに貢献しているかどうかという点について、いずれも良好なものではな

かった。それに比べて５周年調査の結果は、いずれの点についても、「あーち」を利用することによって肯定的な変化があったとされる結果であった（津田他、2012c）。もちろん、これまでの「あーち」の活動には、いくばくの変化はあり、理念から後退するような部分もあったかもしれない。しかし、調査結果が示しているほどの大きな状況変化があったという実感はない。大きく変わったとすれば、利用者の数である。「あーち」の利用者は、2011年度に年間30,000人を超えた。１日の利用者も100人を超えることが当たり前になると、よく顔を合わせる利用者どうしばかりでなく、他者との関わりがほとんどない利用者、似た境遇の人たちどうしの閉じた関係を継続する利用者が多くなる。仲の良いママ友グループの利用者、同じ幼稚園に通う子どもと親たちが、ほとんど他者と交流することなく帰っていくという状況が、確かに多く認められるようになった。つまり、多様な人たちどうし相互に影響を与えあう中心的なコミュニティと、周辺化された多数の利用者という二層構造ができてきたのではないか。10周年調査の量的調査において、多様な「あーち」のプログラムに参加している人ほど肯定的な変化があったという結果が、この仮説を裏付けている。

そうだとすれば、本論で扱った質的データは、多様な人たちどうし相互に影響を与え合う中心的なコミュニティの中で起こっていたできごとに関するものと理解することができよう。今後の「あーち」の実践課題は、こうした肯定的な変化が起きるコミュニティを「あーち」全体に波及させていくことができるか、ということになろう。その際、これまで構築されてきた中心的なコミュニティを周辺に拡張していくのか、あるいは「あーち」内部に多数の中心的なコミュニティを創出し、それらを相互に結び付けていくのか、といった選択肢がある。

「あーち」の利用者数がひとつのコミュニティに収斂していく人数ではなくなってきているということを考えると、後者の方針を採用するのが妥当なのではないかと思われる。同質性の高い閉ざされた関係にゆらぎを与えるしかけを積極的につくることによって、多様な人たちが相互に影響を与える小さなコミュニティをあちこちで生起させるというイメージである。

すでにこれまで、「あーち」は都市型中間施設のモデル開発を行ってきた。都市型中間施設という概念は、「あーち」での実践的研究の中から生まれてきたものである。地域社会に生起しているさまざまな課題の根底に働きかける機能をもつ施設の概念を「あーち」での実践との関係で生成・発展させてきた（津田、2011a；津田編、2011b；津田、2012b）。都市型中間施設のモデル化は、すでにいくつかの機会に行ってきたが、本論の成果も踏まえた新たなモデルの開発に着手しなければならない。多様な人たちが相互に影響を与え合うコミュニティがいくつも生まれ、さらに複数のコミュニティどうしが相互に影響を与え合う、といった営みが生起するような「あーち」のプログラムや場のしかけづくりが、新たなモデルの内実となろう。

【注】

1）宮坂広作は、「閉ざされた私事性」「開かれた私事性」「閉ざされた公共性」「開かれた公共性」といった四つの象限の把握を行っている。宮坂によれば、エゴイズムと通底する「閉ざされた私事性」に対して、“個人の内面の自由という原理に立脚して、自己の選択した価値に対して誠実であろうとする生活態度”をもった「開かれた私事性」がある。また、“個を否定したり、マイノリティを無視して、マジョリティや全体を絶対視し、さらに他者集団に対して自己集団の利益を一方的に擁護しようとする”「閉ざされた公共性」に対して、“各人が生活の主体としての自己の生活設計を持ち、他者と共存し、共生しようとする意志を尊重する”「開かれた公共性」がある（宮坂、1987、pp.33-34）。また、堀尾輝久は、近代公教育を、教育の第一義的責任が親にあるとした上で、「私事の組織化」によって成り立っていると捉え（堀尾、1971、p.10）、それに対して持田栄一は、社会共同の事業としての教育という観点を強調している（持田、1979、p.63）。教育は、家族の中で行われる私事を立脚点としつつも、私事の組織化を通して社会共同の事業へと発展していくという方向性で議論されてきたのだと言える。これらの議論を踏まえると、子育て支援は、親への第一義的責任を課すことを前提とするという意味で私事性に立脚していながら、育っていく子どもが市民となり国民となるといった観点からは高い共同性、公共性も負っていると理解できる。本論で問題として捉えるのは、親子の固定的で閉ざされた関係性に基づく子育てであり、また共同利害によって仲間意識を形成するような共同性に至る道筋である。それに対して、他者との対話や協働を通じて親子の関係性やアイデンティティが不断に更新されていくような子育ての道筋を追求している。

【文献】

堀尾輝久（1961）『現代教育の思想と構造』岩波書店

伊藤篤・津田英二・寺村ゆかの・稲本恵子（2016）「「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」実践の意義と課題」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』10(1)、pp.93-108

宮坂広作（1987）『現代日本の社会教育』明石書店、1987年

持田栄一（1979）『持田栄一著作集６』明治図書

津田英二（2011a）「「都市型中間施設」概念の可能性」『生涯学習・社会教育研究ジャーナル』第５号

津田英二編（2011b）『インクルーシヴな地域社会創成のための都市型中間施設』神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

津田英二（2012a）「「場の力」を明らかにする」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』Vol.19、pp.34-43

津田英二（2012b）『物語としての発達／文化を介した教育』生活書院

津田英二・伊藤篤・寺村ゆかの・井手良徳（2012c）「「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」実践の意義と課題」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』5(2)、pp.173-185